

リス（傈僳）族における中国内地会の伝道活動についての考察

徐 亦猛

Missionary Activities of the China Inland Mission among the Lisu Tribe

Yimeng XU

福岡女学院大学紀要

国際キャリア学部編抜刷 Vol. 9, 2023

リス（傈僳）族における中国内地会の伝道活動についての考察¹

徐 亦猛

Missionary Activities of the China Inland Mission among the Lisu Tribe

Yimeng XU

これまで中国における農村のキリスト教受容の状況についての研究を積み重ねてきたが、中国におけるキリスト教受容の問題を考察する際、単に漢民族を取り上げて検討するだけでは不十分であり、中国の少数民族の信仰状況やキリスト教の受容について考察する必要がある。中国は、悠久の歴史をもつ文明国の一つであり、約56の民族からなる多民族国家でもある。中国の長い歴史をふりかえると、少数民族問題は常に歴代王朝にとって社会安定を図るための最重要問題であり、1949年の「中華人民共和国」成立以後も、政府が解決すべき最優先課題として位置づけられてきた。現代の中国少数民族において経済、政治の成長と共に、キリスト教の広がり是非常に著しい。この現象は、中国少数民族の宗教研究においてきわめて興味深い課題である。従来、それぞれ文化、伝統が異なる中国の少数民族の宗教的基盤は伝統的な原始宗教であった。しかし、中国の少数民族の間に非常に浸透しているのは、少数民族の伝統的な原始宗教や絶大的な影響力をもつ儒教、道教、仏教などといった漢民族の伝統的な民間信仰ではなく、西洋文化の根源であるキリスト教である。キリスト教は外来の宗教として、中国少数民族の伝統的な原始宗教、道徳規範、既に形成されていたライフスタイル、及び少数民族本来の文化と社会的構造に多大な影響と衝撃を与えたのは間違いない。中国西南部に位置する雲南省は、多くの少数民族が居住する中国でも最も複雑な地域である。さらに、雲南省における諸少数民族は祖先である人間を神として信仰、崇拝し、この信仰と崇拝により民族の生活方法を支配し、自分自身の行為の規範としたので、独特な雲南の宗教文化が形成された。雲南省本土の少数民族は長期的に

¹ 本研究は2020年度科研費（研究課題番号：JP20K01233）により実施されたものである。

つづく閉鎖的な環境の中で暮らしていたため、伝統的な原始宗教が存続されてきた。清朝末期から各時代の中国政府はこの地の少数民族に様々な同化政策を行ってきたその根幹として少数民族子弟に儒教と道教の思想と信仰儀式を押し付けた。しかしこの地では、少数民族の伝統的原始宗教の社会的基盤が非常に強いため、漢民族の宗教と文化は終始諸少数民族からの頑強な抵抗を受け、今日まで普及してこなかった。

19世紀末、滇（雲南の別称）西北部の大理、東北部の昭通など山岳の地域で、西洋伝道会（特に中国内地会）の宣教活動が活発に行われるに従い、少数民族の改宗者数は急速に増え、漢民族の信徒数を超えるに至ったという驚くべき大きな成果をあげた。なぜ少数民族に対して中国内地会の伝道は大きな成果をあげられたのか。その背後にある中国内地会の伝道政策及び伝道手段は何であったのか。

こうした歴史的、社会的背景のもとに、本論文は、少数民族との深い関係がありながら、その実態が解明しきれていない中国内地会（China Inland Mission）の伝道活動を考察し、中国内地会の伝道実態を解明する。さらに20世紀初期、少数民族キリスト者（特にリス族）の自立を促すための卓越な指導者であり、中国内地会中国西南部地域の総監督でもある J.フレーザー（富能仁）を取り上げ、中国内地会への報告書を活かし、彼の伝道活動を焦点に、ミッション団体と少数民族の間においてこれまで解明されてこなかった布教関係及び事象を明らかにする。

一、リス族の歴史と原始信仰

伝統的なリス族の精神構造において、宗教は中心的な地位を占めた。先祖から継承されたリス族の宗教は、社会の変化に伴って一定の変化を遂げた原始宗教である。雲南省社会科学院宗教研究所の楊学政が著した「原始社会における民衆の意識、行為、精神、物質すべては、原始宗教の中に含まれている」²という定義に則せば、リス族のキリスト教受容を考察するためには、リス族の歴史と原始宗教を分析する必要がある。

リス族は中国の公認する56の民族の中で21番目の人口を持つ少数民族であり、中国の雲南省、四川省、チベットの間にある州、県に住んでいる。またタイ北部、

² 楊学政『原始宗教論』、雲南人民出版社、1991年、1頁。

ビルマ北部、インド東部などにも散在する少数民族である。中国国内のリス族総人口は約63万人であるが、そのうち特に雲南省には60万人余りいる。雲南省のリス族は主に雲南省怒江リス族自治州と緯西リス族自治県に住み、ほかに雲南省麗江、保山、徳宏、大理などの州、県、四川省の西昌、塩源、徳昌などの県にも住む³。

リス族は氏羌族の後裔であるが、歴史上、リス族が王や元首を持ち、広範な地域を支配する国家を持ち得たことは一度もない。険しい山岳地帯で小規模な村々に分散して焼畑移動耕作を営んでいた彼らの政治的な非凝集性にも起因するのだろうが、移動を繰り返すたびに、常により強大な民族（漢族、チベット族など）と接して軍事的劣勢を継続的に強いられたことの帰結でもあろう。このような消極的な南方移動の連続がリス族の現在の分布を作りあげたともいえる。

固有文字を持たず、一切記録が残っていない以上、リス族の歴史的起源は不明である。だが彼らの分布を見ても、川が存在が大きくリス族を規定してきたことだけは想像に難くない。リス族自身の間で語り継がれている口頭伝承中にも川は頻出する⁴。

リス族が正式に古文獻に登場し始めるのは8世紀からであり、判明している限りにおいて最も早いのは唐代の『蛮書』第四卷と『新唐書・南蛮伝』の中で言及されている⁵。基本的には、リス族が現四川省の木里、比源、比辺の南北のラインから雲南省麗江地区にかけての金沙江両岸地帯に居住していたと考えられている⁶。明代に入ってからはリス族に関する記述も急激に増え、『麗江府史』によれば、15世紀から16世紀の元代から明代にかけての時代には、緯西から麗江地区にかけてのリス族はナシ族の土司により、奴隸として強制的に労役につかされており、特に明代の嘉靖年間から万暦年間にかけてのチベット族との争いにおいては、リス族がナシ族の先兵として最前線に立ったと言及された⁷。このような抑圧は、リス族に西方への移動を誘発し、彼らの多くは潤滄江（メコン川）西岸から怒江

³ 楊天民『中国的少数民族』、協傳培訓中心、2004年、245頁。

⁴ 綾部真雄「国境と少数民族—タイ北部リス族における移住と国境認識」『東南アジア研究』35巻4号、京都大学、1998年、178頁。

⁵ 王恒傑『僰僰族』、民族出版社、1987年、16頁。

⁶ 雲南省編集組（編）『僰僰族、怒族、勐墨人（白族支系）社会历史调查』、雲南人民出版社、1984年、2頁。

⁷ 『僰僰族簡史』編集組（編）『僰僰族簡史』、雲南人民出版社、1983年、17頁。

(サルウィン川) 近辺の地域を目指して歴史的な大移動を開始させた。そして最終的には同地域の支配的民族としての地位を確立するに至ったのである。しかし、清代以降のリス族の歴史は抗清闘争に明け暮れるものに転じてしまい、雲貴の総督が建てた「平夷」碑によれば、19世紀の初頭に緯西地区のリス族が清朝政府に対して大規模反乱を起こしたが最終的には鎮圧され、2000人以上のリス族の人々が斬首の刑を受けたともされる⁸。リス族の移動とその過程における平地社会との接触は、言語、宗教、服飾文化などに多大な影響をもたらすため、漢民族族はリスを民族衣装の特色に従って花リス、白リス、黒リスの三つに分類した⁹。

伝統的なリス族の原始宗教は主に自然崇拜、祖霊信仰と種々の精霊信仰である。彼らにとって、すべての自然現象の背後に超自然的な力があると認識している。山の神、樹木の神、雨の神、火の神、川の神、月の神などといった自然現象をすべて神であると信じている。

リス族の原始宗教はイ族の原始宗教と似ている。その鬼神観念はシンプルかつユニークである。リス族にとって、世のすべてのものの中に精霊が宿り、宇宙万物は最高神(ミス)と精霊(尼)によって支配されるため、民衆は最高神(ミス)とすべての精霊(尼)を祭祀したのである。祭祀する過程において、鬼神を軽蔑するというユニークな方法を取り、精霊を激しく叱責するのである。その例として旱魃の時、民衆が雨乞いのために龍に祈るが、祈っても雨が降らない時は龍を叱責する儀式へと変更する。人が病気になった時、まず精霊に祈りを捧げるが、治らなければ精霊を叱ったり、駆除する儀式を行い、病気を癒そうとする。

リス族の宗教教職者は尼扒と尼古扒である¹⁰。尼扒はリス族の司祭であり、巫師である¹¹。各家庭の儀式や部族を祭る集団の儀式において尼扒が登場し、信者を集めていただけではなく、この世とあの世の橋渡し役でもある。尼扒は太鼓を叩いて精霊(祖先)を呼び、その精霊(祖先)と人間との仲介役(宗教的な役割)を果たすほか、リス族の伝統文化の伝承者でもある。尼扒は文化や知識に習熟し、

⁸ 雲南省編集組、前掲書、2頁。

⁹ 綾部、前掲書、179頁。

¹⁰ 尼扒と尼古扒はともにリス族の宗教教職者である。尼扒の社会的地位は高い、宗教儀式を取り仕切るだけでなく、部族の長でもある。尼古扒は、民衆のために占いの役割を果たす。ただ、社会的地位はあまり高くないため、普段の労働も参加しなければならない。

¹¹ 覃光広等編著、伊藤清司監訳、王汝瀾訳『中国少数民族の信仰と習俗 上巻』、第一書房、1993年、345頁。

リス族の天文暦法、地理、倫理、神話伝説などに関する知識を熟知する。そのため、尼扒はリス族社会における宗教活動に従事する神と人間の意思の媒介者であるだけでなく、社会における知識を主管する存在でもある。尼扒はリス族の民衆と多方面にわたってつながりを持ち、リス族社会において、極めて重要な存在である。

二、中国内地会

中国内地会 (China Inland Mission) は1865年にイギリス人宣教師ジェームズ・ハドソン・テラー (戴德生、James Hudson Taylor) によって設立された中国国内では最大の教派を超え、国を超える宣教団体である。内地会の宣教政策を正確に理解するため、その創始者であるテラーに注目する必要がある。

1832年5月31日、テラーはイングランド・ヨークシャーのバーンズレーで、熱心なメソジストの家庭に生まれた。彼の父は薬剤師であり、メソジスト派の信徒伝道者でもあったが¹²、何よりも中国人に関心を持っていて、常に中国の偉大な歴史と文化をテラーに紹介した。幼少期において、テラーは両親の篤いキリスト教信仰による薫陶を受け、将来は父の憧れた中国へ伝道に行くことと決心した。しかし、15歳で、テラーがバーンズレー銀行で事務員として働きはじめた時、昼休み中に銀行の同僚の会話から今まで耳にしたこともない物質中心のことや神に対する懐疑的な考えを揶揄われた。そのためテラーは懐疑的な同僚と同じ考えをもつようになり、神のことは頭の隅に置かれ、世俗のことばかり注目するようになった¹³。死後の世界に何の望みもないのだから、この世の快樂を楽しむのが一番だと思って、金銭、富、馬車、優雅な生活などが、テラーの追い求める人生目的となった¹⁴。このように、世俗の生活と信仰との矛盾に煩悶するという思春期特有の悩みを抱えることによって、テラーは祈りをやめ、キリスト教信仰から離れてしまった。

¹² A.J.Broomhall, *Hudson Taylor & China's Open Century Part One Barbarians at the Gates*, Hodder and Stoughton and The Overseas Missionary Fellowship, 1981, p283.

¹³ ロジャー・スティーア著、栗原督枝訳『ハドソン・テラーキリストに生きた人』、いのちのことは社、2000年、15-16頁。

¹⁴ 徐欣嫻『全然奉獻為中國的戴家：從戴德生到戴繼宗』、財團法人基督教宇宙光全人關懷機構、台灣、2006年、20頁

しかし1849年6月、17歳のテラーは、暇つぶしに父の書齋で読む物を探し、本棚で一枚の福音トラクトを取り出して読み、感銘を受け、キリスト教へ回心するに至った。彼にとって、このトラクトに書かれている内容は単純であるが、意味深く、真実の響きがあった。銀行の同僚たちの小賢しい話がすべて薄っぺらで取るに足りないものに思え¹⁵、長い間の疑問や恐れが消え、大いなる喜びと平安を感じた¹⁶。同年、父親から中国での伝道を志す宣教師が極端に少ないことを聞き知ったテラーは、「それでは、わたしのために中国へ行きなさい」という神の声を聞き、中国に宣教師として召されていることを確信した¹⁷。

1852年、テラーはイギリスの中国福音伝道協会（Chinese Evangelization Society）に加わり、宣教師として中国に派遣され、上海やその付近で势力的に宣教活動を展開した。しかし、テラーを送り出した中国福音伝道協会は資金基盤が弱く、宣教師に十分な支援ができないため、1857年テラーは同協会を脱退し、イギリス国内の友人の支援を頼りに独立伝道を始めた。中国人と接する多くの機会と人々の福音に対する反応を見るにつけ、テラーはより多くの宣教師がこの機会を活用できないものかと考えるようになり、内地会設立の構想が芽生え始めた。

1860年、テラーは療養のため、一旦イギリスに戻るが、療養後は中国宣教の必要性をイギリス各地で講演して回り、1865年にはそれらの講演をもとにした本『中国、その魂の必要と要求』（China, its Spiritual Needs and Claims）を出版し、たちまちベストセラーとなり、それまで停滞気味だったイギリス人の中国宣教への関心を大いに喚起した。テラーの書籍において、設立される中国宣教団体は超教派であり、国際的組織であるという構想を明らかにした¹⁸。書籍の出版から得た資金のもと、テラーはロンドンに本部を置く中国内地会を設立し、宣教師の募集にとりかかった¹⁹。テラーが求める宣教師を志す人間の資質は、ほかの

¹⁵ 同上、16頁。

¹⁶ ハワード・テラー著、舟喜信訳『ハドソン・テラーの生涯とその秘訣』、いのちのこば社、1997年、13頁。

¹⁷ Dr. and Mrs. Howard Taylor, *Hudson Taylor and the China Inland Mission: The Growth of a Work of God, China Inland Mission*, London, 1918, p51.

¹⁸ J.H. Taylor, *China, its Spiritual Needs and Claims*, London, 1865, p87. ハワード・テラー著、前掲書、19頁。

¹⁹ 徐欣嫻、前掲書、80頁。

宣教団体と異なっていた。一般の宣教団体が望んだのは、大学卒という高い教育を受け、かつ挨拶を受けた人が好ましいとされた。テラーも知性的な、教養のある人を求めたが、最も大切なのは宣教師候補者の霊的資質である。最も必要な霊的資質とは、教理上の知識、学問がなく、教派、国籍が異なり、また資格がなくても、真実な神がおられるという不動の信仰的確信と神に信頼する敬虔さである²⁰。テラーは、中国に自らを捧げる宣教師の少ないことを訴え、安定的な生活を送るイギリスのキリスト者を奮いたたせつつ、「信仰と聖霊に満たされた人物であれば、例え教育を受けていなくても未踏の地に福音を持ち運ぶという、この神に祝福された務めに従事できない理由はない」と述べている²¹。

テラーは自由主義的な神学理解を重視せず、福音主義、敬虔主義的伝道を内地会に徹底させたのである。そのため、内地会の一般向けの教育、出版事業に対する関心は、福音を世俗化させる恐れがあるとの理由から、他の宣教師団体と比べて低調であった²²。

また内地会の宣教師は、保障された給料ではなく、必要を満たして下さる神に信頼し、収入は分かち合い、負債に陥らない。このような現地主義を取ったことは、一般の宣教団体の組織的なあり方への挑戦でもあった。他教派の宣教師は本国の宣教母体から伝道資金を調達し、宣教母体に様々な便宜を要求できても、宣教母体の決定に最終的には従わなくてはならず、伝道の現場の真の必要が満たされないことがしばしば生じていたのである。そのため、内地会本部は宣教地における宣教師の活動に指示を与えることをせず、すべて現場にいる宣教師自身に任せ、ひいては中国各地にいるリーダーによって指導させた。内地会にとって、短い期間で全中国に伝道することが第一の務めとしたので、一つの拠点に教会を建て、長期間滞在し、信者の信仰教育を行うよりも、宣教地を広げることに力を入れた²³。さらに、内地会に所属する宣教師は、特定の教派から招くのではなく、すべての優れたキリスト教会から招くとした。

これらの特徴に加えてテラーは中国文化への深い尊敬の念を持ち、自分の経験から、辮髪を結び、中国人の服装を取り入れ、中国人の言語を習得し、中国人

²⁰ ロジャー・スティーア著、前掲書、216頁。

²¹ J.H. Taylor, *ibid.*, p46.

²² *Records of the General Conference, 1877*, pp196-203, pp235-241.

²³ *The China Mission Hand Book*, Shanghai, 1896, pp111-112.

の習慣を学び、健康と体質に差支えない限り、中国人の食事に馴染むこと、すなわち中国の生活様式の全面的な採用によって中国人と宣教師との距離が驚くほど縮まると確信していた。テラーにとって、世界中で中国ほど、宗教に対して寛大な国はない。君主や国民がキリスト教に反対する唯一の理由は、それが西洋人の宗教であり、信者を西洋になびかせる傾向があるからというものである。宣教師たちの西洋の服や乗り物、西洋風の外観をもつ教会、さらに、宗教に関わるすべてのことにまつわる西洋の様式によって、中国での宣教活動がひどく妨げられていることから、宣教師とその家族は、西洋式的生活スタイルを放棄し、中国人の様式を受け入れるという原則を宣教の手段とした。それは同時に、神の壮大な計画への参与という意味を持っている。テラーが求めるのは、中国人の国民性を奪うことではなく、キリストへの信仰を与えることである²⁴。

こうしてこれまでの宣教の枠組みやスタイルを打ち破る画期的な方針を掲げた内地会は、後にプロテスタントの中で出身国が最多の多様化した宣教師を擁し²⁵、最大の伝道対象地域を誇る宣教団体に成長した²⁶。

三、リス族における英国宣教師 J. フレーザー（富能仁）の初期活動

リス族に積極的に宣教活動を取り込んだのは、内地会の英国人宣教師 J. フレーザー（富能仁）である。フレーザーは1886年8月26日イギリスロンドンの北西部セント・オールバンズ（St.Albans）で英国循道公会の信徒であった両親のもとに生まれた。フレーザーは伝統的なクリスチヤンの家庭で育てられたが、小さい頃から伝道者になろうと思ってはいなかった。毎週家族と一緒に教会の活動に参加していたが、大学に入ってから初めて本気で自分の信仰について考えた。フレーザーの信仰面の成長時期は、ちょうど当時英国福音第二次大覚醒運動のただ中であつた。

高校卒業後、フレーザーはインペリアル・カレッジ・ロンドンの工学部に入り、積極的に学内の聖書研究会に出席し、大学にある循道会のチャペルオルガニスト

²⁴ ロジャー・ステューア著、前掲書、255頁。

²⁵ 同上、217頁。

²⁶ 徐亦猛「中国少数民族におけるキリスト教の受容に関する研究—中国内地会の宣教活動を中心に」『宣教学ジャーナル』、第11号、2017年、44-48頁参照。

や日曜学校の教師として奉仕した。これらの教会活動を通して、彼の信仰は深められたと同時に、中国で活躍する内地会の創始者テーラーの活動を知った。フレーザーに宣教志願の意欲を引き出したのは『無言』(No Not Say)というキリスト教書籍であった。その本を読んで、フレーザーは世界伝道がキリスト者の使命であると認識した²⁷。1906年の信徒訓練集会でフレーザーはケンブリッジセブン(Cambridge Seven)²⁸の一人であるチャールズ・トーマス・スタッド(Charles Thomas Studd)と出会い、彼の影響で大学卒業後、内地会へ中国伝道の志願書を提出した。1907年、21歳のフレーザーはロンドン北部の内地会本部へ赴き、一年間の訓練を受けた。その期間に休暇のため英国に戻った多くの宣教師や教会指導者と出会って、聖書研究の方法を学び、神学についての理解も一層深め、後の中国宣教に堅固な基礎を築いた。

1908年9月12日、フレーザーは中国へ向かって出発し、同年11月2日上海に到着した。内地会の規定に従い、彼は安慶の語学学校に入り、中国語の訓練を受けた。フレーザーは語学の才能があったが、西洋人にとって、中国語の勉強は簡単ではなかった。フレーザーは中国語の学習や中国人との交流に長い間苦勞した。安慶で半年間の語学研修後、フレーザーは宣教支援のため、雲南へ赴いた。当時の内地会中国西南部地域の総監督はマッカーシー(John McCarthy)であった。内地会の内部においては、宣教師人員不足ゆえ、宣教重点の対象を漢民族に置くことを主張したが、マッカーシーは雲南少数民族地域の宣教の重要性を痛感し、自ら安慶の語学学校へ赴き、フレーザーの才能を高く評価し、自分の後継者として彼を指名した。二人は香港、ビルマを経由し、1909年5月24日雲南騰越に辿り着いた。当時騰越にはフレーザーより1年早くエンブリー宣教師夫妻(安選三 Mr. & Mrs. Embery)が住んでいた。エンブリー夫妻の助けにより、フレーザーは民家を借り、中国語を勉強しながら、エンブリー夫妻の宣教活動に協力した。フレーザーは市場やリビングルームで聞いた日常会話の単語を記録し、ひたすら練習し続けた努力により、内地会の中で最も中国語の達者な宣教師の一人となった。

フレーザーは、騰越を拠点に主として保山地区の伝道に力を注ぐことになる。

²⁷ Mrs. Howard Taylor, *Behand The Ranges*, London: Lutterworth Press, 1945, p.21.

²⁸ ケンブリッジセブンは中国内地会の創始者ジェームズ・ハドソン・テーラーによって中国への宣教師として受け入れられたケンブリッジ大学の6人の学生と王立陸軍士官学校の1人の学生を指す。

当初は、中国語を学びつつ漢族中心に布教を行っていたが、次第に保山や騰越周辺の少数民族（タイ族、リス族など）に注目していく。おそらく、少数民族の多くが、漢族とは異なり、外国人宣教師に好意的であり、喜んで彼らの話を聞いてくれることが、彼らのもとを足しげく訪ねる一つの原因であったと思われる。1910年頃のフレーザーは身一つで、時にはロバを牽き、僅かな荷物で、山から山へ渡り歩き、広い地域に散在するリス族の村を訪ね、彼らに福音を伝え続けた。リス族の案内人や同伴者がつくこともあれば、一人で険しい山地を越えることもあった。フレーザーは懸命に伝道活動を行った。キリスト教に好感を持つリス族の人は少しずつ増えたが、キリスト教へ回心する人はほとんど現れなかった。それについてはいくつかの原因が考えられる。

まず一人で広大な地域を巡回する方法では、自からに限界があった。フレーザーによって信者となったものたちは、彼が次の巡回で村にやってくるまで、自分たちだけで信仰を守らなければならなかった。リス族は文字を有しておらず、それゆえ、聖書や賛美歌集はおろか、書かれた教えが何もない状態で、フレーザーの次の訪問を待つことになる。このような時、信仰に熱心であった者、特に中心となった若者が病気になると、村の信者に動揺を与えることになった。村人にとっては、新しい信仰も古い信仰と同じ次元で計られることになるからである。つまり、キリストへの祈りが病気の治癒に有効なのかどうなのかが問われることになった。そして、信仰ある者の死は、多くの場合、村人を元の伝統信仰に戻らせることになった²⁹。

次に、宣教師の不足である。1877年マッカーシーはビルマから経由し雲南に入ってから、内地会は雲南で五つの伝道拠点を設定した。1911年以前その地域で宣教活動を展開する宣教師の数は10名未満であった。内地会の宣教師の宣教手段は非常に単純で、基本的には市場など人が集まる場所で公開説教したり、宗教書籍や冊子など配ったりしたのである。この方法は人手不足により、医療や教育伝道を展開することに困難があった。マッカーシーは1911年の報告書の中で「現在、雲南において内地会の医療宣教師は一人もいない。クラーク（花国香 Geroge W. Clarke）は休暇のため大理を離れ、エンブリー宣教師夫妻が大理へ行かなければならない。そしてフレーザーが一人で騰越に滞在した年月は2年に及ばなかつ

²⁹ 福本勝清「雲南における中国内地会の伝道1900-1952」『明治大学教養論集』、通巻529号、2017年、115頁。

た」³⁰と述べた。

その後、フレーザーに多くのアドバイスを与えたマッカーシーは1911年6月20日病のため昆明で亡くなり、さらに中国国内に辛亥革命が勃発、フレーザーは雲南の宣教を中断せざるを得なかったので、ビルマへ避難した。

四、リス族における英国宣教師 J. フレーザー（富能仁）活動の再開

1912年雲南の政局が安定し、フレーザーは再び騰越に戻った。辛亥革命以後、騰越の漢民族の住民はキリスト教に対する態度を大きく変え、友好的になったことにより、宣教活動は転機を迎えた。説教を聞きに来る人数の増加はフレーザーに喜びをもたらした。1912年報告書により、「現在礼拝に参加する人数は本当に増えた。先週日曜日礼拝の参加者は45人となった。あなたたちにとって、微々たる人数かもしれないが、こちらの礼拝堂は本当に一杯になった。もし騰越で婦人伝道者がいれば、現地の女性を礼拝に連れてくることができ、礼拝人数は100人以上になる。昨年と比べて、騰越の状況はかなり変わった」³¹と書いた。

騰越教会の発展過程においても、フレーザーはリス族への伝道計画を忘れることができなかった³²。1913年初、一人のリス族の青年が結婚の費用が足りないため、フレーザーに借金をしに訪れた。内地会の原則は信徒にお金を貸さない方針だが、フレーザーは再三悩んだ末、この青年にお金を貸した。結果的にはこの青年は借金を全額返済しただけではなく、彼を結婚式に招待した。フレーザーは高地にあるリス族青年の村を訪ね、結婚式に参加し、その一族や近隣に福音を伝えたのをきっかけにリス族への布教活動を再始動した。リス族村の巡回伝道中、フレーザーは400ぐらいのリス族の言葉を収集し、それを使いながら、リス族と交流し³³、その年の春、リス族の集いで、入信を希望するものに香炉や偶像を捨てさせることに成功する。リス族の信仰は一般にはアミニズムや祖霊崇拜なので、それに関する神像や位牌のようなものを捨てさせたのであろう。

³⁰ Editorial Notes, China's Millions, British ed. April 1911, p.56.

³¹ J.O.Fraser "A New Departure at Tengyuen, Yunan", China's Millions, British ed. December, 1912, p.188.

³² Ocpt, pp188-189.

³³ Elieen Crossman, Mountain Rain, OMF, 1982. p.21.

1914年の秋、フレイザーはリス族へ文字伝道の必要性を感じ、ビルマに渡り、米国バプテスト教会の宣教師及びカチン族の宣教師とリス族の文字を作ることを相談した。一時的に宣教地を離れたフレイザーはこれまでの宣教のプロセス及び遭遇した問題などを思い巡らせ、1915年10月から12月までの内地会の雑誌『億萬華民』(China's Millions)において「中国宣教の発見」という文章を連載し、約六年間の宣教経歴を読者に紹介した。社会的閉塞感や文化の違いが引き起こした誤解などにより、漢民族への伝道は失敗であったが、リス族の間の福音の必要性が増えることにより、宣教の重点をリス族へ置く重要性を訴えた³⁴。

1915年フレイザーは、カチン族の宣教師 Ba Thaw (巴東) の協力を得て、リス文字を作り、1918年リス族の信者(摩西)などの協力を得て、「要理問答」、「マルコによる福音書」、「ヨハネによる福音書」をリス語に翻訳し、1920年ヤンゴンで印刷している。さらに、1919年からフレイザーはリス族文字を修正し、1922年リス族文字のハンドブックを出版した。

土着主義はフレイザーのリス族伝道の中心原則であった。フレイザーにとって、現地教会の自立はとても大切であり、西洋伝道会からの経済援助は教会の自立の発展の妨げになると思ひ、教会が自立すれば、外部環境の変化の影響を受けず、もっと大きな活力を有することができるとした。、そのため、フレイザーは信徒の自立の為諸策を次々と打ち出した。

例えば、フレイザーは、リス族などの、教会の活動の手伝いなどに、報酬を払わないようにした。フレイザーにとって、現地の信者が宣教師に雇われ、それが日常化すれば、宣教師に最も近い信者たちのいる現地教会の自立につながらないと思ったのである。また、教会建設も現地の信徒の献金でおこなうべきだと考えた。1918年3月盈江県で最初のリス族の教会は完全にリス族信徒の献金により、草ぶきの教会を建てることができた。また、印刷されたリス語の聖書は、リス族に無償で配られたのではなく、リス族はそれを手に入れるためには、対価を払わねばならなかった。その土地の教会は、如何に貧しくとも自前の力によって教会建設を進めるべきであるとするのがフレイザーの考え方であった。フレイザーは、現地教会が自立すれば、宣教師は顧問にすぎないと述べた。「宣教師は教会という建物を建てるための足場である」³⁵とも述べたとされる。つまり、建物が完

³⁴ James O. Fraser "Some Observations on Missions Works in China", China's Millions, British, edited, 1915, pp.153-155.

成されれば、足場は取り払われることになる。

フレイザーが心がけていたのは、宣教師が現地の信徒を見守ることができなくなる時が来た時、現地の人々の力で信仰を守りぬくことができるようにすることである。そのため現地教会の自立は不可欠なのである。自立のためには、現地の信徒の中から、伝道者が生まれなければならない。リス族伝道者の育成が必須であり、1928年6名のリス族伝道師を養成した。それぞれの教会の運営も長老たちに委ねられたという。また、毎年、雨期の農閑期において、聖書学校を開き、広く伝道者を養成している。おそらく、この聖書学校および、イースターやクリスマスなどの祝祭には、遠くからリス族を中心とした人々が、催しが開催される教会に多数集まってくる。そこから、普段は山岳のあちこちに離れ離れになって暮らしていた諸部族が顔を合わせ、友情を培う。これもまた、入信の、予期せざる効果であった。

ハドソン・テラーの後を継ぎ、中国内地会総幹事となったホスト(D.E.Hoste, 1861-1946)は、フレイザーを非常に信頼していた。1924年秋、フレイザーが二年間の休暇から戻ってきた折、甘肅省蘭州に派遣され、約3年間、リス族の宣教から離れた。その後、より内地会上海本部に近いところに活躍の場を与えようと、ホストがフレイザーに江蘇省の責任者になることを望んだが、あくまでもリス族の伝道にこだわるフレイザーは、それを断り、最終的に、1928年、内地会の中国西南部総監督となって雲南に戻った³⁵。その後、フレイザーはリス族への伝道のため、本部に伝道者の不足を積極的訴え、宣教師の派遣を強く要請した。ホストの協力を得て、1930年頃、雲南西部には、クーン夫妻(楊志英、John B. Kuhn)、ハリソン夫妻(李徳富、J. David Harrison)など若い宣教師たちが派遣され、フレイザーと共に活発に少数民族伝道を展開し、多くの回心者が現れた。ようやく、播いた種が大きな収穫を結ぶ時代を迎えたのである。1938年9月25日フレイザーは脳マラリア感染により、52年の生涯を閉じ、保山の付近の山に埋葬された³⁷。

³⁵ 福本、前掲書、128頁。

³⁶ 同上、129頁。

³⁷ フレイザーのお墓は様々な原因で何回も移転され、2002年イースターの時、保山清華キリスト教会の敷地内に保管された。

結論

以上の考察を通して、リス族における内地会の活動の歴史的背景について、主に以下の二点を明らかにした。

第一に、リス族の改宗から約百年もの長い時が経ち、キリスト教はリス族の価値観と社会構造に大きな変化をもたらしながら深く浸透し、キリスト教改宗以前に見られた原始宗教の実践の多くがキリスト教によって代替され、更にキリスト教はリス族民衆の普段の生活の重要な一部分になっている。リス族の精神生活を支えるのは、伝統的な原始宗教ではなく、宣教師が伝えたキリスト教である。リス族キリスト者は、キリスト教の様々な教えの中で、抑圧された少数民族として特に彼らの経験してきた苦難に対する説明と救済の可能性に関心を抱き、より多くの民族成長の機会を得られたと言えるのである。

第二に、西洋伝道会の宣教師の働きの展開である。内地会の宣教師フレーザーの中国に渡来する目的は一つの民族を導き、信仰を持たせることであった。結果として、彼は自分の念願を達成した。フレーザーは中国の少数民族地域においてのリス族との出会いによって、彼はこの国、この地域、この民族に自分のすべての愛と心血を注いだ。フレーザーは限られた宣教資源を生かし、最大限現地の民衆を自立させ、現地の民衆と協力関係を築き、現地の民衆を伝道者として養成する宣教方法を採用した。彼は有効的な宣教活動を展開するため、積極的にリス族の言葉と文化、伝統を習い、彼らと一緒に生活し、最後には自分の命さえも惜しまず、リス族のため、宣教事業のために差し出した。フレーザーは自分自身の人格的な魅力や献身的な行動によって、リス族社会において、大きな共感を得、多くの改宗者を獲得できたと評価できる。